明治時代の著述者　渋江保の著述活動
出版物「万国戦史」を中心に

山　本　　勉

〔抄　録〕

本稿においては、渋江保の代表的な著作、万国戦史に焦点を当て、日清戦争時に出版された万国戦史の概要について触れると共に、全24巻の万国戦史の中で、渋江名義の10巻及び他筆者名義ではあるが、渋江が実質執筆者であることが確認された8巻についても取り上げ、渋江はどのように万国戦史を執筆したのか、万国戦史シリーズ執筆において渋江が果たした役割や万国戦史24冊の特徴について考察する。

キーワード　渋江保、万国戦史構成、万国戦史著者、博文館、清末中国語翻訳

1　はじめに

渋江保は、その生涯において多くの著作翻訳を手がけているが、その存在を知る人は決して多くない。これまで渋江に関しての研究もほとんど行われておらず、渋江保の存在を知ることができるのは、森鴎外の著書『渋江抽斎』である。明治期には、清朝末期の中国から多くの留学生が来日している。当時、留学生達は、日本を通して西洋の文化を学び、中国を近代化させるために、日本書漢訳の団体を作り、多くの書籍を中国語に翻訳し、その中には万国戦史も含まれている。小論では、渋江の著述活動について検証を行い、渋江保の代表作、万国戦史そのものに焦点を当て、万国戦史の特徴について明らかにするものである。

2　渋江保の略歴

渋江保は、明治・大正時代の著述家、小説家、翻訳家、心霊研究家である。渋江保は、1857年（安政４年）７月26日、渋江抽斎の七男として江戸に生まれ、名を成善と称した。幼年時代を江戸で過ごし、1868年（明治元年）、本国の弘前へ移る。渋江保の父、抽斎は医者であったが、保は漢学者の道を歩みはじめる。

渋江は、1890年（明治23年）、博文館より、通俗教育全書シリーズを皮切りに、様々な著書を執筆していくが、1901年（明治34年）出版の『出世の栞続』が博文館での最後の仕事となっ

た。その後、大学館より冒険小説や催眠術書を出版している。また、大正時代に入り、明治から昭和初期の漢詩人である上村売剣（1866 ～ 1946）が渋江保の為に創設した三才社や神誠館より、易学関係の書籍を出版し、1930年（昭和5年）4月7日に逝去している。

3　渋江保と東京博文館

博文館については、坪谷善四郎編の『博文館五十年史』や田村哲三の『近代出版文化を切り開いた出版王国の光と影　博文館興亡六十年』に詳しく書かれている。田村哲三の『近代出版文化を切り開いた出版王国の光と影　博文館興亡六十年』の「まえがき」にもあるが、博文館という出版社をひと言で言い表せば、「出版社の原点であり縮図でもある」(1) と言える。創刊雑誌の『日本大家論集』をはじめ多くの雑誌を発行して読者層を広げると共に、『通俗教育全書』を始めとする全集物を次々と刊行して成功を収めた。また、博文館は、大橋佐平・新太郎親子が創業したコンツェルン、一大企業グループでもあった。現在も印刷業界大手の共同印刷は、大橋佐平が1897年（明治30年）に博文館印刷所を創業したのに始まる。大橋新太郎は、第一生命保険相互会社や日本郵船会社、大日本麦酒会社（現　アサヒビール・サッポロビール）等、現在でも一流企業として日本の経済界をリードしている会社の取締役等となり、財界人としても活躍した。なお、大橋佐平は、日本最初の大橋図書館を設立しており、その歴史的意義は極めて大きい。

書肆、東京博文館と渋江保との関係を示す資料は、森鴎外の『渋江抽斎』に見られる。『渋江抽斎』のその110には、「抽斎歿後の第三十一年は明治二十二年である。一月八日に保は東京博文館の求めに応じて履歴書、写真並に文稿を寄示した。これが保のこの書肆のために書を著すに至った端緒である。交渉は漸歩を進めて、保は次第に暁鐘新報社に遠かり、博文館に近いた。」(2) また、「抽斎歿後の第三十二年は明治二十三年である。保は三月三日に静岡から入京して、麹町有楽町二丁目二番地竹の舎に寄寓した。静岡を去るに臨んで、渋江塾を閉じ、英学校、英華学校、文武館三校の教職を辞した。ただ『暁鐘新報』の社説は東京において草することを約した。入京後三月二十六日から博文館のためにする著作翻訳の稿を起した。七月十八日に保は神田仲猿楽町五番地豊田春賀の許に転寓した。」(3) とあるように、1890年（明治23年）3月26日より、書肆、博文館での執筆活動が始まった。

4　渋江保と万国戦史

（1）万国戦史発刊の経緯

万国戦史シリーズは、1984年（明治27年）9月28日に、川崎三郎（川崎紫山）によって、第一編『独佛戦史』が刊行された。第一編の版権・広告の頁に次ぐ「独佛戦史諸新聞評」には、都新聞を

皮切りに30社の新聞評が掲載されている。日清戦争が、1894年（明治27年）７月から1895年（明治28年）3月にかけて行われており、万国戦史シリーズは、日清戦争が行われて間もない頃に刊行されたことがわかる。30社余りにも及ぶ新聞評の中には、日清戦争に触れたものもある。北海道毎日新聞では、「本書は萬國戦史第一編として東京博文館に依って版行されたり獨佛戦争は即是近世の大戦争、日清交戦の今日之を讀むあらば裨益するものあるや必せり」(4) とある。当時、西欧列強によるアジアの植民地化が進み、その脅威にさらされていた日本にとって、過去の欧米の戦史から学ぶ意義も大きかった。こうしたことに鑑み、日清戦争最中の万国戦史シリーズの発刊は、読者を取り込む当を得た出版となった。

坪谷善四郎編の『博文館五十年史』には、万国戦史について二カ所の記載が見られる。そのうち一カ所については、111頁、「第三編　日清戦役前後　戦史及戦争物の出版」に次のような記述が見られる。「既に「日清戦争実記」に大好評を博するや、続いて幾多の戦役関係書を出版した。即ち二十七年十月以来「万国戦史」二十四冊を毎月一回（定価十八銭）にて出版した。その題目と著者は第一編　川崎紫山著　独佛戦史。第二編　松井柏軒著　英清鴉片戦史。第三編　野々村五郎著　拿破崙戦史。第四編　松井柏軒著　英仏聯合征清戦史。第五編　越山玉坡著　トラファルガー海戦史等にして、何れも、時好に投じ当時上梓された、幾多の戦史物中の白眉と称された。」(5) とある。刊行当時、「白眉」と言う最上級の賞賛を込めて万国戦史シリーズは世に送り出された。

明治期出版の万国戦史

（2）万国戦史全巻の概要

万国戦史シリーズは、全24巻で構成されているが、第二編『英清　鴉片戦史』の版権に次ぐ万国戦史シリーズの広告欄に「全部拾二巻」とあるので、当初は24巻ではなく、12巻完結シリーズで刊行されたものと思われる。この万国戦史シリーズは、1894年（明治27年）9月28日に、川崎三郎（川崎紫山）によって、第一編『独佛戦史』が刊行されてから、1896年（明治29年）9月24日に第二十四編『希臘波斯戦史』まで二年余りに渡って出版された。実際に、第一編『独佛戦史』の版権に次ぐ万国戦史シリーズの広告欄には、「毎月壱回十五日刊行ス」とあるように、ほぼ一ヶ月に一編のペースで刊行されている。万国戦史の紙数は、同広告欄によると、「毎編読切洋装美本紙数三百廿頁」(6) とある。また、第二編『英清　鴉片戦史』の版権に次ぐ万国戦史シリーズの広告欄には、「毎編読切洋装毎月一回発兌一冊（三百頁以上）」(7) とある。「万国戦史概要」（表１）にその詳細を記載したが、第三編の『拿破崙戦史』が506頁の長編になっているのを除いては、他の23編は、ほぼ320頁前後となっている。実際に24編の総頁数から1編当たりの平均頁数を計算すると、326．25頁となる。広告頁も含めると333．375頁となる。第

八編『普墺戦史』の「第四編第四章　普軍索遜尼を占領す」212頁には、「宣戦詔書、及ひ宣戦令は紙数限りあるを以て略す。」(8)とある。また同書「第六編第二章　普墺和を媾す」281頁には、「然れども彼れが此の役に於ける勳功の詳細は、本書之を記すの余地なく。遺憾ながらも之を略したり、他日を以て詳叙する亅（こと）あるべし。」(9)とある。このような記載は、渋江名義の万国戦史の随所に見られ、渋江が紙数を規定内にまとめることに腐心している様子が見受けられる。次に万国戦史シリーズ24冊の執筆者（万国戦史の表紙に掲載された執筆者）を見ると、渋江保名義が10冊と最も多く、次いで松井廣吉名義が6冊、越山平三郎名義が3冊、川崎三郎（川崎紫山）名義、野々村金五郎名義、柳井録太郎名義、国府犀東名義、岸上質軒名義が各1冊ずつとなっている。この点だけから見ると、24冊中10冊を渋江が執筆していることになり、渋江執筆の割合は、4割近くにも及ぶ。

万　国　戦　史　概　要（表1）

巻数	書　名（上段） 総頁数（下段）	頭註の数	割注の数	掲載執筆者（上段） 実質執筆者（下段）	実質執筆者の執筆時の年齢	出版年月日（西暦）〈上段〉 出版年月日（元号）〈下段〉
1	独佛戦史 322頁（広告掲載頁 14頁含）	0	0	川崎三郎 （川崎三郎）	30歳	1894年9月28日 （明治27年9月28日）
2	英清 鴉片戦史 305頁（広告掲載頁 24頁含）	0	269	松井廣吉 （渋江保）	渋江保 38歳 松井広吉 28歳	1894年10月27日 （明治27年10月27日）
3	拿破崙戦史 506頁（広告掲載頁 0頁）	144	3	野々村金五郎 （野々村金五郎）	25歳	1894年12月4日 （明治27年12月4日）
4	英佛聯合征清戦史 315頁（広告掲載頁 5頁含）	101	209	松井廣吉 （渋江保）	渋江保 38歳 松井広吉 28歳	1894年12月31日 （明治27年12月31日）
5	トラファルガー海戦史 304頁（広告掲載頁 12頁含）	0	0	越山平三郎 （越山平三郎）	越山平三郎27歳	1895年1月31日 （明治28年1月31日）
6	露土戦史 318頁（広告掲載頁 7頁含）	0	224	松井廣吉 （渋江保）	渋江保 39歳 松井広吉29歳	1895年2月28日 （明治28年2月28日）
7	米國南北戦史 320頁（広告掲載頁 7頁含）	0	304	松井廣吉 （渋江保）	渋江保 39歳 松井広吉29歳	1895年3月26日 （明治28年3月26日）
8	普墺戦史 336頁（広告掲載頁 3頁含）	278	381	渋江保 （羽化生 渋江保）	39歳	1895年5月15日 （明治28年5月15日）
9	ナイル海戦史 302頁（広告掲載頁 5頁含）	0	0	越山平三郎 （越山平三郎）	越山平三郎27歳	1895年6月18日 （明治28年6月18日）
10	波蘭衰亡戦史 329頁（広告掲載頁 3頁含）	393	414	渋江保 （羽化生 渋江保）	39歳	1895年7月16日 （明治28年7月16日）
11	クリミア戦史 329頁（広告掲載頁 7頁含）	239	527	松井廣吉 （渋江保）	渋江保 39歳 松井広吉29歳	1895年8月18日 （明治28年8月18日）
12	印度蚕食戦史 356頁（広告掲載頁 3頁含）	336	874	渋江保 （渋江保）	39歳	1895年9月20日 （明治28年9月20日）
13	英米海戦史 314頁（広告掲載頁 9頁含）	0	0	越山平三郎 （越山平三郎）	越山平三郎27歳	1895年10月17日 （明治28年10月17日）
14	伊太利独立戦史 334頁（広告掲載頁 3頁含）	0	301	松井廣吉 （渋江保）	渋江保 39歳 松井広吉29歳	1895年11月19日 （明治28年11月19日）
15	米國独立戦史 331頁（広告掲載頁 4頁含）	276	493	渋江保 （渋江保）	39歳	1895年12月19日 （明治28年12月19日）
16	希臘独立戦史 308頁（広告掲載頁 10頁含）	0	378	柳井録太郎 （渋江保）	40歳	1896年1月23日 （明治29年1月23日）
17	英國革命戦史 328頁（広告掲載頁 7頁含）	360	871	渋江保 （羽化生 渋江保）	40歳	1896年2月17日 （明治29年2月17日）
18	佛國革命戦史 336頁（広告掲載頁 6頁含）	295	594	渋江保 （渋江保）	40歳	1896年3月20日 （明治29年3月20日）

19	三十年戦史 338頁（広告掲載頁 8頁含）	0	0	国府犀東 （国府犀東）	23歳	1896年4月24日 （明治29年4月24日）
20	フレデリック大王七年戦史 352頁（広告掲載頁 4頁含）	203	607	渋江保 （渋江保）	40歳	1896年5月18日 （明治29年5月18日）
21	シーサルボンベー 羅馬戦史 334頁（広告掲載頁 8頁含）	0	0	岸上質軒 （岸上質軒一部を渋江保）	渋江保 40歳 岸上質軒36歳	1896年6月26日 （明治29年6月26日）
22	羅馬、加達額爾 ピュニック戦史 333頁（広告掲載頁 4頁含）	315	476	渋江保 （渋江保）	40歳	1896年7月19日 （明治29年7月19日）
23	歴山大王一統戦史 326頁（広告掲載頁 9頁含）	207	427	渋江保 （渋江保）	40歳	1896年8月17日 （明治29年8月17日）
24	希臘波斯戦史 325頁（広告掲載頁 9頁含）	307	268	渋江保 （渋江保）	40歳	1896年9月24日 （明治29年9月24日）

（3）渋江保名義、万国戦史10巻の構成と概要

渋江保名義の万国戦史は、シリーズ第8編目にやっと刊行されている。24冊中10冊を渋江が執筆していることを勘案すると、渋江名義の万国戦史が第8編目であるので刊行がやや遅い感がある。渋江名義の万国戦史は、刊行順に、第8編『普墺戦史』、第10編『波蘭衰亡戦史』、第12編『印度蚕食戦史』、第15編『米國独立戦史』、第17編『英國革命戦史』、第18編『佛國革命戦史』、第20編『フレデリック大王七年戦史』、第22編『羅馬、加達額爾　ピュニック戦史』、第23編『歴山大王一統戦史』、第24編『希臘波斯戦史』である。渋江名義の万国戦史の最大の特徴は、頭註（本文上端の余白に書き込んだ注釈）を附していることと、本文内に見られる割註である。「万国戦史概要」（表１）にその詳細を記載したが、10冊中、最も少ない頭註でも、第20編『フレデリック大王七年戦史』の頭註は203項目に上る。多いものは、第10編『波蘭衰亡戦史』の393項目である。割註については、最も少ないものは、第24編『希臘波斯戦史』の268項目である。最も多いものは、第17編『英國革命戦史』の871項目で、驚異的な数である。読者が頭註を見れば、本文中の大方の大意が読み取れる程であり、読者への便宜を図ったものである。また、割註についても、欧米の戦記を読者に理解させるために、西暦を元号に一つ一つ直して附す等便宜を図っている。また、元号に改めただけではなく、日本の歴史上における出来事を付け加えるなどして読者の理解を助けている。第17編『英國革命戦史』の「第一編　第一章」14頁の割註には、西暦一千三百七十七年について「我が天授三年丁巳（足利三代将軍義満の時）」[10] の割註がある。同書「第四編　第二章」240頁の割註には、盲目の老人ガリレオ（Galileo）について、「ガリレオは、一五六四年（我が永禄六年甲子）生れ、一六四二年（我が寛永十九年壬午）死す。伊太利最も有名なる天文学者なり。當時天文上に就きて信する所を述べたるを以て、宗教裁判所の獄裏に縲絏の身とは為りぬ。本文に盲目と云ふは、是より先に眼を失ひたるを以てなり。」[11] と丁寧な説明が附してあり、割註の詳細な説明にはいちいち驚嘆させられる。この割註を数百項目附すにはかなりの時間と労力を割いたことが伺える。

（4）他筆者名義、渋江保執筆、万国戦史8巻の構成と概要

渋江名義の万国戦史が10冊刊行されていることに触れたが、『抽斎歿後』から思わぬ事実が判明した。それは、他筆者名義の万国戦史8冊を『抽斎歿後』において渋江自身が執筆していると明言していることである。このことについては、藤元直樹も『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』において既に指摘しているが、実際に実物で確認してみたい。『抽斎歿後』には頁数が記載されていないため私が附した。第二編『英清鴉片戦史』については、『抽斎歿後』の120頁に渋江保が執筆した他の著書と並べて掲載されている。具体的に見ていくと、「明治二十七年本年著訳の書　哲学大意。日々のおきて。人物学。西洋事物起原。記臆術。催眠術。社会観察論。開智術。婢僕管理法。英清鴉片戦史。英佛聯合征清戦史。露土戦史。北米南北戦史。電気世界。婚姻の友（以上博文館より出板）外に雑誌原稿」(12) とある。第二編『英清鴉片戦史』の表紙の名義は、「柏軒松井廣吉編」、版権の名義も「編者松井廣吉」となっている。同様に、第四編『英佛聯合征清戦史』については、120頁に見られる。第四編『英佛聯合征清戦史』の表紙の名義は、「松井廣吉著」、版権の名義も「著者松井廣吉」となっている。第六編『露土戦史』についても120頁に見られる。第六編『露土戦史』の表紙の名義は、「松井廣吉著」、版権の名義も「著者松井廣吉」となっている。第七編『米國南北戦史』は、『北米南北戦史』として120頁に見られるが、『米國南北戦史』に間違いなかろう。第七編『米國南北戦史』の表紙の名義は、「松井廣吉著」、版権の名義も「著者松井廣吉」となっている。第十一編『クリミア戦史』は『クリメア戦史』として120頁の明治二十八年の項目に見られるが、『クリミア戦史』に間違いない。『クリミア戦史』の表紙の名義は、「松井廣吉著」、版権の名義も「著者松井廣吉」となっている。第十四編『伊太利独立戦史』についても明治二十八年の項目に見られる。『伊太利独立戦史』の表紙の名義は、「松井廣吉著」、版権の名義も「著者松井廣吉」となっている。第十六編『希臘独立戦史』についても明治二十八年の項目に見られる。『希臘独立戦史』の表紙の名義は、「柳井絅齋著」、版権の名義は「著者柳井録太郎」となっている。第二十一編『シーサルボンベー羅馬戦史』については、120頁の明治二十九年の項目に「シーザルポムペー羅馬戦史（一部分）」とある。『シーサルボンベー羅馬戦史』の表紙の名義は、「岸上操纂譯」、版権の名義も「著者岸上操」となっている。つまり、渋江保は、渋江保名義の10冊、松井廣吉名義の６冊及び柳井録太郎名義の１冊、岸上質軒名義の1冊の18冊を執筆していることになる。その割合は、何と万国戦史シリーズの3／4、75％にも及ぶ。但し、『シーサルボンベー羅馬戦史』については、『抽斎歿後』において「シーザルポムペー羅馬戦史（一部分）」とあるので、執筆は一部分に留まった可能性が高い。更に渋江は、他筆者名義の万国戦史を渋江自身が執筆したことを割註及ひ本文で触れた箇所がある。実際に万国戦史の割註を見て行きたい。先ず第八編『普墺戦史』であるが、109頁の割註に「凡て外交上の慣例に於て、各政府我が挙動を外國政府に通報し、又は我が所考を之に開陳せんと欲するときは、其の地駐在の我が公使に充つるの書翰を作り、而して其の公使をして、其の地の外務大臣に之を披見せしむるなり。此の事は、生曩きに「露

土戦史」に於て之を述べたれど、同書を閲読せられざる人の為めにもと思ひて再ひ茲に之を記しぬ。」(13) とある。また56頁本文に「カタリナ二世は・・（中略）・・而して露國人民は、其の功績の赫々たるに眩マサレテ、大女皇の尊号を贈れり。（澁江保著クリミア戦史）」(14) とある。97頁本文には、「世に云ふ。露國の英主彼得大帝・・（中略）・・彼れ等が彼得大帝の遺志を継ぎて、異國を挾める冂（こと）は、歴然として火を賭るが如し。（澁江保著　クリミア史）」とある。(15) 304頁の割註に「拙著『クリミア戦史』に詳なり」(16) とある。次ぎに第十二編『印度蚕食戦史』であるが、314頁の脚注に「曩きに羽化生の著はしたる「クリミア戦史」」(17) とある。第二十編『フレデリック大王七年戦史』では、262頁の割註に「1672年（我が寛文十二年壬子）生まれ、1725年（我が享保十年乙巳）崩す。羽化生著『クリミヤ戦史』『神童』に傳あり。」(18) とある。また、本文330頁に「左に掲ぐるカタリナ二世の事は、羽化生著『波蘭衰亡戦史』及ひ羽化生著『クリミア戦史』に據り、且つサンガー著『売淫史』（Sanger's History of Prostitution）に據りて之を補ふ」(19) とある。第二十二編『羅馬、加達額爾ピュニック戦史』では、本文の10頁に「左に羽化生譯『歴史研究法』（下巻百十二頁）に依りて、ロミユラスの即位より、ターク井アスの廃位に至るまで、累代諸王の表を掲げん。（但し曩きに羽化生著『伊太利独立戦史』の中に引用したり。）」(20) とある。第二十四編『希臘波斯戦史』では、24頁の割註に「而して紀中多く英雄の功績を録するを以て、此の時代を称して『英雄時代』（Heroic age）とは云ふなり。【是れ等の事は、羽化生曩きに『希戦独立戦史』の中に載せたれば、同書と参看すべし。】」(21) とある。36頁の割注にも「本章は、羽化生著『希臘独立戦史』と同じく、スウ井ントン著『万國史』に據る」(22) とある。また、本文に「左れど其の中に於けるエスキラス（Aeschylus）。ソフヲクリス（Sophocles）。ユーリピデス（Euripides）ソクラテス（Socrates）。プレトー（Plato）スシヂデス（Thucydides）。ゼノフヲン（Xenophon）ソロン（Solon）の傳は、生既に『希臘独立戦史』の中に載せたれば、茲には之を載せず。」(23) とある。

以上、渋江名義の5冊の万国戦史の割註や本文の中に、松井廣吉名義の第六編『露土戦史』・第十一編『クリミア戦史』・第十四編『伊太利独立戦史』と柳井録太郎名義の第十六編『希臘独立戦史』の４編が渋江の執筆であることを明示している。しかしなぜ割註や本文に渋江執筆であることを明示したまま出版されたか。校正の段階で、渋江の執筆であることを削除することは可能だったはずであるが、今となっては謎である。なお、第二編『英清鴉片戦史』・第四編『英佛聯合征清戦史』・第七編『米國南北戦史』・第二十一編『シーサルボンベー羅馬戦史』について、割註や本文には渋江の執筆であるとの明言はなかった。但し、松井廣吉名義の第四編『英佛聯合征清戦史』と第十一編『クリミア戦史』の割註に、渋江が執筆したと言う明示はなかったものの、実質執筆者が渋江である万国戦史名が割註に数カ所見られた。具体的にそれぞれ一例を挙げる。第四編『英佛聯合征清戦史』の2頁の割註には、「英國公使ポチンヂヤー（Pottinger）【此の條約締結の事を司り、結了後、香港太守に任したる人なり。『鴉片戦史』に傳あり。】」(24) とある。また、第十一編『クリミア戦史』の15頁の割注には、「サンステファ

ノの條約【我が明治十一年に結びたる條約なり。曩きに『露土戦争』の中に委しく載せたり。】」[25] とある。 次ぎに、渋江名義の万国戦史10巻の割注について検証したい。

（5）万国戦史の本文割注に見る渋江保の著作

渋江は、渋江名義の万国戦史10冊の割註に、渋江執筆の著作を数多く掲載している。割註に見る渋江名義の著作は、複数同様の書名があるが、延べ数にして310ヶ所の著作の記載がある。ここでは、本文及ひ割註に記載された著作から渋江の著作態度を探ってみたい。

渋江名義の万国戦史10冊の割註に記載されている渋江の著作は大きく二つに分類することができる。一つは、既に刊行されている渋江の著作であり、もう一つは、訳了及び今後出版予定の著書である。藤元直樹も、割註に渋江が執筆した著作の他に、訳了及び今後出版予定の著書が記載されている点を『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』において既に指摘している。[26] 渋江は、35種類の自書を参考文献として挙げているが、先ずはじめに、既に刊行されている著作名と掲載数を著書ごとに列挙する。『クリミア戦史』6ヶ所、『西洋文学家一口話』1ヶ所、『羅馬、加爾達額ピユニック戦史』5ヶ所、『伊太利独立戦史』1ヶ所、『逸話文庫』2ヶ所、『印度蚕食戦史』10ヶ所、『英国文学史』11ヶ所、『英國革命戦史』5ヶ所、『希臘独立戦史』3ヶ所、『希臘波斯戦史』12ヶ所、『希臘文学史』32ヶ所、『希臘羅馬文学史』3ヶ所、『幸福要訣』2ヶ所、『フレデリック大王七年戦史』 7ヶ所、『社会学』 1ヶ所、『処世活法』1ヶ所、『神童』16ヶ所、『西洋事情起源』2ヶ所、『泰西婦女亀鑑』3ヶ所、『哲学大意』8ヶ所、『独逸文学史』3ヶ所、『波蘭衰亡戦史』9ヶ所、『普墺戦史』9ヶ所、『米國独立戦史』7ヶ所、『万国百偉人』6ヶ所、『万国地理』8ヶ所、『雄辯法』6ヶ所、『羅馬文学史』22ヶ所、『歴山大王一統戦史』17ヶ所、『歴史研究法』4ヶ所、『露土戦史』2ヶ所、『佛國革命戦史』14ヶ所、『佛国文学史』4ヶ所、『国民錦嚢』5ヶ所、『万国発明家列伝』3ヶ所の計250ヶ所である。これら刊行された著作は、渋江が翻訳し出版した書籍であると思われれる。この中で、『独逸文学史』と『佛国文学史』は、『独佛文学史』であると思われる。

次に、注目すべきは、渋江の訳了及び今後出版予定の著書が記載されている割注が60箇所にも及ぶ点である。実際に、渋江は、どのようなジャンルの本を訳了し、今後出版しようとしていたのかを具体的に見ていきたい。ここでは、訳了及び今後出版予定の著書とその掲載本を挙げて、渋江の著作の特徴を探ってみたい。

①ウ井リアム一世『英國革命戦史』253頁
②キツポンの羅馬衰亡史『羅馬、加達額爾　ピュニック戦史』序文４頁
③グロート希臘史『希臘波斯戦史』序文2頁・28頁・31頁・123頁・123頁
④クロムウエル『英国革命戦史』297頁・300頁
⑤ジファソン『米國独立戦史』216頁
⑥ストーニアスの羅馬十二帝紀『羅馬、加達額爾　ピュニック戦史』序文4頁・10頁・12頁・

218頁

⑦チャールス五世『英国革命戦史』12頁

⑧ヒロドタス史記『希臘波斯戦史』序文2頁・31頁・163頁・177頁・217頁・286頁、『歴山大王一統戦史』171頁

⑨プルターク英雄傳『希臘波斯戦史』序文2頁・130頁・177頁、『フレデリック大王七年戦史』75頁、『羅馬、加達額爾ピュニック戦史』8頁・218頁、『歴山大王一統戦史』10頁

⑩フレデリック大王『フレデリック大王七年戦史』169頁・232頁・283頁

⑪マールブロー『フレデリック大王七年戦史』263頁

⑫メリヴエール羅馬史『羅馬、加達額爾　ピュニック戦史』序文4頁

⑬モンセン羅馬史『羅馬、加達額爾　ピュニック戦史』序文４頁・218頁

⑭モンテスキューの羅馬盛衰記『羅馬、加達額爾　ピュニック戦史』序文4頁

⑮リヴ井ー羅馬史『羅馬、加達額爾　ピュニック戦史』序文4頁・8頁

⑯羅馬史『歴山大王一統戦史』69頁

⑰印度史『印度蚕食戦史』7頁

⑱英雄傳『羅馬、加達額爾　ピュニック戦史』24頁、『印度蚕食戦史』66頁・163頁

⑲希臘英雄冒険譚『歴山大王一統戦史』146頁・146頁

⑳希臘史『歴山大王一統戦史』13頁・47頁・125頁

㉑希臘神代紀『歴山大王一統戦史』40頁・261頁

㉒上代希臘人家内の生活『希臘波斯戦史』296頁

㉓売淫史『フレデリック大王七年戦史』333頁

㉔羅馬史『羅馬、加達額爾　ピュニック戦史』9頁・46頁・81頁

㉕歴山史『歴山大王一統戦史』95頁

㉖書名は明らかにされていないが、ローラン婦人についての書籍である。割注に以下のようにある。（当時夫人が獄中に於て認めたる辨白書あり。明かに其の必事の在る所を示し、語極めて悲壮。読む者をして覚えず両眼を濡さしむ。予曩きに其の大意を取りて、『大家論集』の中に掲げたりき。他日待ちて全文を訳述すべし。）『フレデリック大王七年戦史』260頁

㉗書名は明らかにされていないが、歴山大王についての書籍である。（予は 今此の偉業の事蹟を叙述せんとす。然れども紙数甚少なく、編纂の事業に費すべき日予は更に一層少なきを以て、固より完全を期する㇀（こと）能はず。只可及的詳密に、可及的明瞭に之を叙述せん㇀（こと）を期するのみ、但し其の詳密なるもの、数多の日子を費したるものの如きは、他日を待ちて別に公にすべきなり。）『歴山大王一統戦史』序文1頁

以上27冊もの著作を訳了及び今後出版予定していたことを考えると、なぜこれらの書籍が出版できなかったのかという素朴な疑問が起こる。藤元直樹は、『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』において、これらの書籍について「これらが（引用者注：著作を訳了及び今後出版予

定の書籍が）実際にどの程度訳了されていたかは不明であるが、ともかく西洋史に関する多数の書物の刊行を（引用者注：渋江が）計画していたことは間違いない。」[27] と述べている。渋江が既に刊行した著作だけではなく、27冊もの著作を訳了及び今後出版予定していたことを考えると、渋江の能力は超人的だと言わざる負えない。

（6）万国戦史の特徴と渋江保の著作態度

1）若手執筆者の登用と万国戦史

万国戦史を執筆した当時の若手執筆者の年齢と執筆順を概観すると奇妙なことに気づく。具体的に第一編から第八編までの執筆者とその年齢を見てみたい。第一編『独佛戦史』の川崎三郎は30歳、第二編『英清鴉片戦史』・第四編『英佛聯合征清戦史』・第六編『露土戦史』・第七編『米國南北戦史』の掲載執筆者の松井廣吉は、当時28歳～29歳、第三編『拿破崙戦史』の野々村金五郎は25歳、第五編の『トラファルガー海戦史』の越山平三郎は27歳である。川崎三郎と松井廣吉の両名は、博文館との関係が非常に強く、二人共博文館への貢献度が高い人物である。それ故に、万国戦史刊行の際に、川崎はシリーズの第一編を飾っている。第一編の広告欄に続く「獨佛戦史諸新聞評」において、30社の川崎を賛美した新聞評が掲載されていることからも、博文館における川崎の処遇の仕方がわかる。松井については、万国戦史シリーズ全24冊の6冊、1／4の万国戦史の著者である。また、6冊の内、4冊までは、第八編『普墺戦史』までに名を連ねている。松井は、大橋佐平とは、大橋が上京して博文館を創業する以前の長岡時代からの交友がある。1881年（明治14年）、長岡で「越佐毎日新聞」を創刊したときからの付き合いがあると言うから、苦楽を共にした間柄だったのであろう。このことから、松井廣吉が掲載執筆者として、渋江が名義貸しをしたのは理解できる。しかし、若手の野々村金五郎や越山平三郎が第八編『普墺戦史』までに名前を連ねているのは疑問が残る。考えられるとしたならば、それまでの渋江本の下訳をこれら若手に頼んでいたが、何らかの事情で表に出さざるを得なくなったのではないか。但し、彼らが英語に堪能であったとしても、西洋史や戦史の専門家ではない。第三編『拿破崙戦史』については、更に翻訳を請け負う人間が野々村の下にいたのではないかと推察する。

万国戦史の刊行順と執筆者の関係をみると、初期は松井等の著名人の名義を借りて渋江が翻訳していることがわかる。そして万国戦史シリーズは、その後、渋江著作の万国戦史が続いている。万国戦史シリーズを刊行する時に、何故執筆者をこのように排列したのか、今後の調査を待たなければならないが、博文館の販売戦略上による可能性もある。万国戦史シリーズ前半には、売り上げを増やすために著名人を排列し、売り上げの落ち込みを挽回するために、シリーズ後半に、英語に極めて高い能力を有する越山や漢詩人としても著名で英語の能力もあった岸上、そして『日清戦争実記』の編集者でもあった柳井録太郎を執筆者として使ったのではないか。勿論、英語の堪能だった越山は、掲載執筆者であると共に実質執筆者でもある。国府に関

しては、博文館の「太陽」編集部にも勤めていたが、第十九編『三十年史』を執筆当時、博文館に入社していたのか、また、英語が堪能であったのか、現段階ではわかっていない。

２）万国戦史の特徴

これまで、万国戦史について渋江の著述態度を踏まえて述べてきたが、その特徴についてまとめてみたい。

①渋江保の著作態度と戦史スタイル

渋江の戦史スタイルについて、今井宏は、その著書『明治日本とイギリス革命』の「第五章クロムウエルの木下」203頁から208頁において、第17編『英國革命戦史』を取り上げ、次のように述べている。「英國革命戦史は、書肆博文館が企画した「万国戦史」全24巻の1冊として刊行されている。ここに日清戦争の勝利に酔った当時の雰囲気がまざまざと感じ取れるであろう。しかしながら、本来は、「戦史」として企画されたにもかかわらず、本書の三分の二は、「英國革命の原因」に費やされており主題であるはずの革命の戦闘に関する叙述はほぼ100ページあまりで、内乱の開始からネーズビーの戦にいたる三年間の戦史に限定されてしまっている。これは、明らかに著者の校正の失敗によるものであって、叙述の不均衡は蔽うべくもない。」(28)とある。今井は、戦史としては、「著者の校正の失敗」と評しているが、藤元直樹が『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』において「これは図らずも渋江の著作が明らかに「戦史」を逸脱していたことを示している。」(29)と指摘しているように、決して「著者の校正の失敗」ではなく、渋江の考えた戦史スタイルであったことを証明している。

次に著者として渋江の名が万国戦史に初めて現れる最初の巻、第八巻『普墺戦史』を通して、渋江の戦史スタイルについて述べてみたい。『普墺戦史』は1866年に起こったプロイセン王国とオーストリア帝国との戦争について描いた戦史である。実際に現物の『普墺戦史』から目次を拾い上げると、第一編は、「普墺戦史の原因」となっているが、ここでは、プロシアとオーストリアの旧来の関係や国の由来や祖先ににについて触れ、ドイツ帝の系図等が掲載されている。確かにこれらの記述は普墺戦争の近因ではあるが、直接に関係のないデンマーク戦争やガスタイン協定について述べられている。続く第二編においても、ガスタイン協定に関することを始めとして、当時のプロシアとオーストリアを巡る国際情勢について記述されている。第三編に入り、初めて普墺戦争勃発の起因ついての記述が見られるが、戦争に関する記述は、第一章の「普墺両國始めてホルスタインに争う」の無血戦争の記述の4頁に過ぎない。第四編及ひ第五編に入りやっと戦闘部分についての記載が始まる。第六編はプロシアとオーストリアの戦後処理と講和、第七編は、オーストリアとイタリアとの戦争と講和、ビスマルクの伝記についての記述である。最後に附録として各国の兵力の状況の記載がある。第三編第一章の「普墺両國始めてホルスタインに争う」（4頁）、第四編及ひ第五編（115頁）及ひ第七編の第一章の伊太利に於ける戦争（3頁半）と第二章の墺伊海戦（4頁半）、及ひ附録（17頁）を戦闘部分の記述とす

ると、戦闘部分の総頁数は144頁となる。『普墺戦史』の総頁数は305頁であるので、総頁数に対する戦闘部分の頁数の割合は、凡そ47％余りとなり、戦史物にもかかわらず、戦闘部分の記載が半分以下となっていることが見て取れる。また、『普墺戦史』の小引には、「生が本史を修むるに當り、勉めて戦争の起りたる原因と、其の結果とを詳叙せんヿ（こと）を期したりき。」、「溯りて普墺両國舊来の政略を述べんと欲したれども、是れ亦紙数の制限する所と為りて果たさず。次回に編算すべき」[30] と記載がある。このことから、渋江の『普墺戦史』の内容に戦闘部分の頁が少なくっていることが頷ける。「本書紙数頗る限りあるとを以て、預期の十け一だも遂ぐるヿ（こと）能はず。」[31] と言う渋江の言を見る限り、渋江は、翻訳に際して、博文館から提示された『普墺戦史』の原書から、戦闘のみの戦記ではなく、国際関係や外交史、政治史、伝記までも含んだ戦記を目指したものと思われる。もしそうだとすれば、画期的な戦史とも言える。[32]

②万国戦史の評判

渋江は、博文館において、90冊有余の著作を出版しているにもかかわらず、坪谷善四郎編の『博文館五十年史』には、渋江保の名を記載した箇所は一カ所のみである。渋江の博文館への貢献度は、他の作家と比べても決して劣らないにもかかわらず、何故博文館における渋江の待遇は極めて低いのか。こうした渋江の扱いの低さ、他筆者名義、実質執筆者となった渋江保の万国戦史本の存在を考えると、渋江は、博文館によってゴーストライター扱いされたのである。また未完の万国戦史の構想を見ても、対象がヨーロッパに限定され、日本人が興味を引く戦史は見られない。万国戦史シリーズ発刊時に12編完成予定だった万国戦史は、当初の売れ行きから24編に増やされ、更に増編される予定だったのではないか。それ故、渋江は、万国戦史の割注に堂々と訳了及び今後出版予定の著作名を挙げることができたのである。しかし、出版予定だった万国戦史は売れ行きの不振など何らかの理由で突然の出版打ち切りにあったと推察する。第二編『英清　鴉片戦史』277頁の広告欄に興味深い万国戦史シリーズの広告が掲載されている。その広告の中に、「本巻曩に曾て万国歴史全書を発刊す、今又茲に万国戦史を編纂し、上希臘羅馬時代より下第十九世紀の最近の戦争に至るまて、拮据経営、数百巻中に分載する所を全部十二巻の中に摘み、以て之を世に公にせんとす、是れ亦文運を裨補するの一端にして、本館の自ら任して之に當らんと欲する所也、江湖諸彦幸に陸続愛読を賜へ。」[33] とある。この「数百巻中に分載する所を全部十二巻の中に摘み、以て之を世に公にせんとす」という文言から、数百巻の英語で書かれた万国戦史叢書の存在があったものと思われる。また、当初予定していた頁数を減らしたと思われる戦史がある。例えば、第1編『独佛戦史』の万国戦史シリーズの広告欄に記載されている第八編『普墺戦史』の頁数は「500頁」[34] とあるが、実際に出版された『普墺戦史』の頁数は、広告掲載頁も含めて336頁しかない。この頁の増減は、全ての戦史に当てはまらないが、万国戦史シリーズの規模を縮小した現れの一つと言える。

『博文館五十年史』「第三篇　明治二十七年　戦争関係の出版物」には、万国戦史について次のような記述が見られる。「また戦争に因みて「万国戦史」を発刊し、第一編「獨佛戦史」、第二編「英清阿片戦史」、第三篇「拿破崙戦史」、第四編「英佛聯合征清戦史」、第五編「露土戦史」、第六編「北米南北戦史」等を出版した。然れども時代の要求は専ら当面最近の事実を知らんと欲し、其以外の出版は顧みられず、唯全国壮丁大部分は陸続として戦地に赴き、彼等の親戚知友は、専ら戦地の消息を知らんと欲するに切なれば、斯かる社会の希望に応ずべく、此の年末を以て従来発行の各雑誌は盡とく廃刊し、翌新年より新たに「太陽」、「少年世界」、及び「文藝倶楽部」の三雑誌を創刊し、茲に本館の事業に一新生面を開くことになった。」(35) とある。万国戦史についての記述は、先に触れたようにもう一カ所あり、万国戦史についての評価は全く異なるが、その評価の是非は別としても、この文面からして、『日清戦争実記』の売れ行きに遠く及ばなかったのであろう。このことは、直接渋江の評価にも繋がったはずである。

5　清末中国と万国戦史中国語訳本

渋江保の代表作、万国戦史そのものに焦点を当て、その特徴について検証を行ってきたが、万国戦史シリーズは、アジア諸国にも影響を及ぼしている。実藤恵秀監修の『中國譯日本書綜合目録』には、渋江の万国戦史の書名が見られる。実藤恵秀は、中国文学と日中関係史の研究者であり、日中書籍の翻訳・研究についてのパイオニアでもある。大庭脩・王勇編『日中文化交流史草書9　典籍』によれば、「『中國譯日本書綜合目録』は、香港中文大学の譚汝謙の努力により、香港中文大学出版社より、1981年に刊行され、5765点の刊行書が収録されている。」(36) とある。『中國譯日本書綜合目録』で、渋江執筆または、万国戦史と思われる書籍を見ていくと、305頁には、『支那人気質』（不著日譯者　不著中譯者）、317頁には、『社会学』（渋江保著　全鳴鶯譯）、429頁には、『露土戦紀』（湯叡譯）、430頁には、『英美海戦史』（愛徳華・斯賓原著　越山平三郎譯　世界譯書局重譯）、433頁と519頁には、『普奥戦史』（羽化生著　趙天驥譯）、477頁には、『泰西事物起原』（渋江保編　傳運森譯補）、500頁には、『印度蚕食戦史』（渋江保著　汪郁年譯）、513頁には、『佛國革命史』（渋江保著　人演社譯）・『希臘独立史』（柳井綱齋編　泰嗣宗譯）、514頁には、『波蘭衰亡史』（渋江保編　薛公侠譯）・『波蘭衰亡戦史第一冊』（渋江保編　東京譯書彙編社）・『露土戦紀』（湯叡譯）、520頁には、『意大利独立史』（松井廣吉編　張仁普譯）、524頁には、『英美海戦史』（愛徳華・斯賓原著　越山平三郎譯　世界譯書局重譯）、430頁と525頁には、『美國独立戦史』（渋江保著　東京留学生譯）、644頁には、『羅馬文学史』（渋江保著　何震彝譯）の以上14冊の書籍が見られる。(37) この内、万国戦史と思われる書籍は、『普奥戦史』・『印度蚕食戦史』・『佛國革命史』・『希臘独立史』・『波蘭衰亡史』・『波蘭衰亡戦史第一冊』・『露土戦紀』・『英美海戦史』・『美國独立戦史』・『意大利独立史』の10冊である。『波蘭衰亡史』と『波蘭衰亡戦史第一冊』は同様の書籍で、第10編『波蘭衰亡戦史』であろう。また、

『普奥戦史』は、第8編『普墺戦史』に違いない。『露土戦紀』は、松井廣吉名義、実質執筆者が渋江保の第6編『露土戦史』であろう。『英美海戦史』は、第13編『英米海戦史』であろう。『意大利独立史』は、松井廣吉名義、実質執筆者が渋江保の第14編『伊太利独立戦史』に違いない。『希臘独立史』の柳井綱齋は、柳井録太郎であり、実質執筆者が渋江保の第16編『希臘独立戦史』に違いない。こうして見ていくと、『中國譯日本書綜合目録』には、万国戦史と思われる書籍が、9冊あり、『波蘭衰亡史』と『波蘭衰亡戦史第一冊』を同様の書籍とすると、渋江が実質執筆者である万国戦史は、『印度蚕食戦史』・『佛國革命史』・『希臘独立史』・『波蘭衰亡史』・『露土戦紀』・『美國独立戦史』・『普奥戦史』・『意大利独立史』の8冊となる。以上のことから、『中國譯日本書綜合目録』に掲載された万国戦史は、万国戦史シリーズ24冊の内9冊、つまり37.5％に当たる万国戦史が、中国語に翻訳され出版されたことになる。また、『日中文化交流史草書9　典籍』の「第五章　日中書籍の翻訳と研究」447頁に、訳書彙編社から明治35年から37年に出た本の目録、訳書経眼録から取り出した書籍が掲載されているが、その中に「波蘭衰亡戦史。渋江保著」とある。(38) 同様の記載が、さねとうけいしゅう『中国留学生史談』の142頁にも見られる。(39) また、実藤恵秀『中国人日本留学史』の「35〈東方雑誌〉の広告にあらわれた翻訳書」のＣ中国人の著書の中に、『義大利独立戦史』・『美国独立戦史』・『普墺戦史』・『尼羅海戦史』・『法国戦史』・『飛猟浜独立戦史』の6種類の戦史が見られる。(40) 実藤は、この内、『美国独立戦史』を渋江保の著としている。また『普墺戦史』についても、羽化生（渋江保）の著としている。『飛猟浜独立戦史』については、宮本平著としている。残る三冊については、「これから推して他の３書もおそらく日本書からの訳であろう。」と述べている。(41) 実藤が指摘した三書であるが、『義大利独立戦史』は、松井廣吉名義、実質執筆者、渋江保の万国戦史14編『伊太利独立戦史』、『尼羅海戦史』は、越山平三郎の万国戦史第9編『ナイル海戦史』であろう。『法国戦史』は、渋江保の第18編『佛國革命戦史』と言える。実藤恵秀『中国人日本留学史』の「45洋装書の発展」の日本書を漢訳したもので、旧装本で出版された43種の中に『普墺戦史』の書名が見られる。(42) 康東元の『清末における日本近代文学作品の翻訳と紹介』によれば、「19世紀末から20世紀初頭の清朝末期における中国の文学状況は、阿片戦争の敗北以来、イギリス・フランスを初めとするヨーロッパ列強の帝国主義的侵略の脅威及び腐敗しきった清朝の旧体制、また変法自彊の策という、新政を行うための政治改革運動がクーデターで鎮圧される国内政治情勢の動揺にともなって、変化が生じ、まず、第一に外国文学の翻訳が頻繁に行われるようになった。」とある。(43) また、「近代化を目指した清朝末期の先覚の士は、救国、民衆に対する啓蒙を実現するために翻訳小説を媒介として日本を研究し、欧米の思想や文学を効率よく吸収することを最重点目標としたのである。この時期の日本政治小説、科学冒険小説、探偵小説、軍事小説等にたいしての翻訳紹介も単に日本を学ぶためではなく、日本を西欧に学ぶ「橋」或いは「窓口」として、この「橋」或いは「窓口」を通して、その究極の目標は、翻訳小説を通じて欧米の思想・文学の受容を図ったと言える。」とある。(44) また、潘喜顔の『清末历史译著研究』によれば、「清

末留日学生取代传教士成为翻译的主力,他们共翻译了至少234种历史著作,占全部历史译著的51%,因此可以称为”留日学生主译时期”。」[45] とあり、この文章から、清末の留日学生が宣教師に取って代わり、翻訳の主力を担っていたことが伺える。また、留日学生が多くの歴史書を翻訳していたところから、この時期が「留日学生主訳の時期」と呼ばれていたことがわかる。実藤恵秀の『中国人日本留学史』の「31翻訳の必要性と留学生以前の翻訳」によれば、日清戦争後に設けた訳書局について、李瑞棻が「三にいはく、訳書局を開くなり。兵法にいはく、『己を知り彼を知れば、百戦百勝す』と。今西人と交渉してことごとく其の情偽を知ること能わざるは、此れ弱をあらはすの道なり。彼を知らんことをもとむるには、まず書を訳すに在り。」と言ったことに対して、実藤恵秀は、次のように述べている。「日本にまけ、諸外国からねらわれている中国が、いかにしんけんに新学をまなぼうとしたか、そのためには、留学だけでなく、むしろ留学よりもさきに翻訳をほっしたかが、うかがえる。留学の目的は、主として翻訳の人才をつくるためであったともいえよう。」[46] また、佛教大学教授、李冬木先生の著書『魯迅の研究』の11頁－12頁に、李冬木先生は、『周作人日記』を取り上げ、周作人が読んだ相当数に上る日本書の中に博文館から出版された万国戦史、第10編『波蘭衰亡戦史』が見られることを示唆している。李冬木先生が指摘された『周作人日記』によれば、『波蘭衰亡戦史』は、魯迅が日本出発間際に周作人に送ったものであることがわかる。李冬木先生はこれを踏まえ、魯迅が日本留学前に、既に渋江保のことを知っており、渋江の『波蘭衰亡戦史』に触れていたことを指摘している。[47] 周作人が『波蘭衰亡戦史』を読んでいたことがわかる日記を、李冬木先生の『魯迅の研究』11頁－12頁より具体的に挙げてみたい。『魯迅の研究』よれば、旧暦2月7日の日記に、「上午阅大日本涩江氏保〈波兰衰亡战史〉竣」とある。旧暦3月19日の日記に「下午看〈波兰衰亡战史〉,读竟不觉三叹」[48] とある。周作人が、日記に「读竟不觉三叹」と記しているように、周作人の目には、ポーランドの状況は思わず深いため息が出るような状況に映ったのだろう。藤元直樹も『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』で渋江保の著書が、漢訳・朝鮮語訳されたことについて触れ、「「万国戦史」中の渋江の著作が清国、朝鮮で多く翻訳されていたことは、特に渋江の著作が優れていたからではなく、類書がほとんど見られなかったことに起因すると見るべきであろう。欧米、そして日本によって、亡国の危機にさらされていた朝鮮、清国にとり、世界史の動き、わけてもポーランドの事例は強い関心を持たれていたと考えられ、渋江のそれは彼の地において時宜を得た書物とされたと思われる。」[49] と述べている。実際に、『中國譯日本書綜合目録』に掲載された万国戦史掲載冊数が、万国戦史全24冊中9冊、37.5％と言う数字を見れば明らかである。こうした康、潘、実藤、李、藤元の論文や書籍より、列強の脅威にさらされていた当時の清末中国が、翻訳を通していち早く世界の動きを知ろうとしていたことが伺える。そういう意味でも、万国戦史は時宜を得た書籍と言えるだろう。

6　おわりに

この小論では、明治期という特有な時代に生きた著述家、渋江保の代表作である万国戦史を中心としてその著作活動について検証を重ねた。その結果、24冊中10冊を渋江が執筆し、他筆者名義の万国戦史8冊も渋江自身が執筆したことがわかった。更に渋江名義の万国戦史10冊の割註に、渋江の訳了及び今後出版予定の著書が記載されていることが明らかになった。『中國譯日本書綜合目録』に掲載された万国戦史掲載冊数が万国戦史全24冊中9冊、37.5％と言う数字から、万国戦史が清末中国に及ぼしたことが理解できる。また万国戦史は戦闘のみを記述した戦記ではなく、欧米型に開明した民主的思想の渋江の戦記スタイルが投影された国際関係論や外交史、伝記までも含んだ戦記であることが明らかになった。

〔注〕

（1）田村哲三『近代出版文化を切り開いた出版王国の光と影　博文館興亡六十年』（法学書院　2007年11月25日）前書きⅲ頁
（2）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　1988年11月10日）（その110）304頁－305頁
（3）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　1988年11月10日）（その110）305頁
（4）第一編『独佛戦史』（博文館　1894年9月28日）広告欄5頁
（5）坪谷善四郎編『博文館五十年史』（博文館　1927年6月15日）111頁
（6）第一編『独佛戦史』（博文館　1894年9月28日）広告欄１頁
（7）第二編『英清　鴉片戦史』（博文館　1894年10月30日）広告欄277頁
（8）第八編『普墺戦史』（博文館　1895年5月15日）212頁
（9）第八編『普墺戦史』（博文館　1895年5月15日）281頁
（10）第十七編『英國革命戦史』（博文館　1896年2月17日）14頁割注
（11）第十七編『英國革命戦史』（博文館　1896年2月17日）240頁割注
（12）東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』120頁
（13）第八編『普墺戦史』（博文館　1895年5月15日）109頁割注
（14）第八編『普墺戦史』（博文館　1895年5月15日）56頁
（15）第八編『普墺戦史』（博文館　1895年5月15日）97頁
（16）第八編『普墺戦史』（博文館　1895年5月15日）304頁割注
（17）第十二編『印度蚕食戦史』（博文館　1895年9月20日）314頁割注
（18）第二十編『フレデリック大王七年戦史』（博文館　1896年5月18日）262頁割注
（19）第二十編『フレデリック大王七年戦史』（博文館　1896年5月18日）330頁
（20）二十二編『羅馬、加達額爾ピュニック戦史』（博文館　1896年7月19日）10頁
（21）第二十四編『希臘波斯戦史』（博文館　1896年9月24日）24頁割注

（22）第二十四編『希臘波斯戦史』（博文館　1896年9月24日）36頁割注
（23）第二十四編『希臘波斯戦史』（博文館　1896年9月24日）41頁
（24）第四編『英佛聯合征清戦史』（博文館　1894年12月31日）2頁割注
（25）第十一編『クリミア戦史』（博文館　1895年8月18日）15頁割注
（26）藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』（参考書誌研究第60号2004年3月）98頁－101頁
（27）藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』（参考書誌研究第60号2004年3月）101頁
（28）今井宏『明治日本とイギリス革命』（ちくま学芸文庫1994年4月7日）203頁－208頁
（29）藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』（参考書誌研究第60号2004年3月）101頁
（30）第八編『普墺戦史』（博文館　1895年5月15日）小引3頁
（31）第八編『普墺戦史』（博文館　1895年5月15日）小引3頁
（32）万国戦史は、博文館の企画による渋江の翻案編集によるものが中心である。渋江は欧米の書籍を多数翻訳した経験から欧米型の発想法を身につけた。未公刊修士論文に詳述。
（33）第二編『英清　鴉片戦史』（博文館　1894年10月27日）広告欄277頁
（34）第八編『普墺戦史』（博文館　1895年5月15日）広告欄4頁
（35）坪谷善四郎編『博文館五十年史』（博文館　1927年6月15日）90頁
（36）大庭脩・王勇編『日中文化交流史草書9　典籍』（大修館書店1996年5月1日）435頁
（37）実藤恵秀監修『中国譯日本書綜合目録』（中文大学出版社1980年）305頁・317頁・429頁・430頁・433頁・477頁・500頁・513頁・514頁・519頁・520頁・524頁・525頁・644頁
（38）大庭脩・王勇編『日中文化交流史草書9　典籍』（大修館書店1996年5月1日）447頁
（39）さねとうけいしゅう『中国留学生史談』（第一書房　1981年5月13日）142頁
（40）実藤恵秀『中国人日本留学史』（くろしお出版　1960年3月15日）280頁
（41）実藤恵秀『中国人日本留学史』（くろしお出版　1960年3月15日）281頁
（42）実藤恵秀『中国人日本留学史』（くろしお出版　1960年3月15日）308頁－311頁
（43）康東元『清末における日本近代文学作品の翻訳と紹介』（筑波大学大学院図書館情報メディア研究　2004年）2頁
（44）康東元『清末における日本近代文学作品の翻訳と紹介』（筑波大学大学院図書館情報メディア研究　2004年）11頁
（45）潘喜顔『清末历史译著研究（1901－1911)』（复旦大学 2011年）
（46）実藤恵秀『中国人日本留学史』（くろしお出版1960年3月15日）249頁－251頁
（47）李　冬木『魯迅の研究』（佛教大学通信教育部　2010年4月1日）11頁－12頁
（48）李　冬木『魯迅の研究』（佛教大学通信教育部　2010年4月1日）11頁－12頁
（49）藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』（参考書誌研究第60号2004年3月）105頁

〔参考文献〕（著者名　五十音順）

（1）今井　宏『明治日本とイギリス革命』（ちくま学芸文庫　1994年4月7日）

（２）大田兼雄『羽化渋江保の著作』（日本古書通信　1963年9月15日28巻9号）
（３）大谷正『専修法学論集　歴史書と「歴史」の成立―『西南記伝』の再検討―（１）』（専修大学法学会　2007年7月）
（４）大庭脩『日中文化交流史草書』（大修館書店　1996年5月1日）
（５）太田雄三『英語と日本人』（講談社学術文庫　1995年9月10日）
（６）康東元『筑波大学大学院図書館情報メディア研究第2巻1号　清末における日本近代文学作品の翻訳と紹介　日本文芸の中国における受け入れ方（1)』（筑波大学図書館情報メディア研究」編集委員会　2004年）
（７）実藤恵秀監修『中国譯日本書綜合目録』（中文大学出版社　1980年）
（８）実藤恵秀『中国人日本留学史』（くろしお出版　1960年3月15日）
（９）さねとうけいしゅう『中国留学生史談』〈第一書房　1981年5月13日〉
（10）田村哲三『近代出版文化を切り開いた出版王国の光と影　博文館興亡六十年』（法学書院　2007年11月25日）
（11）坪谷善四郎編『博文館五十年史』（博文館　1927年6月15日）
（12）東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』
（13）藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』（参考書誌研究第60号2004年3月）
（14）藤元直樹『図説翻訳文学総合事典第５巻』（大空社　2009年11月）
（15）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　1988年11月10日）
（16）柳井録太郎『日清戦争実記第七巻第参拾壱編』（博文館　1895年6月27日）
（17）山岡洋一『翻訳についての断章　15年に数千点　明治初期の大翻訳時代』（翻訳通信　2004年3月）
（18）李　冬木『魯迅の研究』（佛教大学通信教育部　2010年4月1日）
（19）『万国戦史全24編』（博文館）

〔付記〕
この論文は大学院修士論文の一部を改稿したものである。大学院の修士論文中間発表会の折、有益なコメント下さった、佛教大学文学部中国文学専攻の諸先生方に感謝いたします。とりわけ指導教授である李冬木先生には、テーマのご示唆から資料の提供、論文構成に至るまでの熱意あふれるご指導に記して感謝申し上げます。

（やまもと　つとむ　文学研究科中国文学専攻修士課程修了）
（指導教員：李　冬木　教授）
2014年9月10日受理